

リード芦屋新聞

発行元
リードあしや

記事
吉原大翔

写真
優真の奏
城野う和
岩天野

KOBEから防災

教訓を次世代へ、117ぼうさい委

神戸松蔭女子学院大学の重松陽香さんは神戸新聞社と神戸市が主催する117 KOBEぼうさい委員会の委員長を務めている。

ぼうさい委員会の主な活動は、月に一度の定期ミーティング、活動情報の発信、小中学校と高校への出前授業、防災ワークショップの運営や出展である。

定期ミーティングでは、出前授業に向けての準備をしている。出前授業では少しでも防災に関する知識を伝えていくために工夫をしている。その工夫とは、小学生に対しては、自然災害の用語を噛み砕いて説明す



る▽中学生に対しては、防災に関する問題を難易度別で出題するーなどである。ワークショップに出展し

た際には、AEDの講習や新聞紙を使った新聞体験など、災害時に実践できることを伝えている。

このような活動を多くの人に知ってもらうため、インターネットを使用した活動発信をしている。

ぼうさい委員会では、117 KOBEぼうさいマスターの育成に取り組んでいる。ぼうさいマスターになるためには、自治体が実施している市民救命士の資格の取得と「ぼうさいWEB検定」の合格が必要になる。検定で使用される、問題はぼうさい委員会のメンバーが作っている。

重松さんと子供たち 活動を通して学んだこと



重松さんは、大学で開催された、ぼうさい委員会の講演がきっかけで、子どもに関わりたいたいという思いから委員会に入ったという。あまり防災に関して詳しくなかった重松さんは、ぼうさい委員会に入ってから防災に関する多くのことを学んだという。

ぼうさい委員会では大学で講演活動をしている。そのため兵庫県阪神地域の様々な大学から、多くの学生が集まって活動している。メンバーの中には防災のことにあまり詳しくない人も含まれている。そこで委員会では、防災を大学で専門的学んでいるメンバーが、防災にあまり詳しくないメンバーに知識を伝えていっている。

「子どもたちと関わる中で苦労したこともあったが、実際に子どもたちと関わったことで成長できた」と語っていた。

リード芦屋新聞

発行元
リードあしや
記事
吉原大翔
写真
天野うの

1・17の教訓

災害備え、約2万1千人分の食糧備蓄

芦屋市都市政策部防災安全課の國則友希さんに、芦屋市が実施している防災事業について話を聞いた。

芦屋市では事前の災害対策として、防災行政無線や防災倉庫の維持管理、ハザードマップや市職員向けの防災マニュアルの作成などを行なっている。自治会や自主防災組織と連携をしながら防災倉庫の資機材の取り扱い方法を確認し災害に備えている。

防災倉庫の食品備蓄は

「阪神淡路大震災のピーク時の避難者に合わせ、約2万1千人が1日過ごせる体制を整えています」と國則



さん。芦屋市は民間企業と災害時防災協定を結んでおり、いざという時には支援をしてもらえる体制を構築

している。災害が発生した場合、市長をトップとする災害対策本部が設置される。対策本

部では情報共有、行政の対応方針の協議、決定をしている。避難情報発令もここで決定されている。

災害からの復興に向けて市役所には災害復興本部が設置される。被災者生活再建支援金などの支援を受けるためには確実証明書が必要で、防災安全課ではその発行のバックアップを行なっている。他にも道路や河川などの早期復旧に向けて関係機関への連絡を担っている。

支援のかたち模索 災害ケースマネジメントの実施へ

芦屋市では一人一人に寄り添った支援、災害ケースマネジメントの実施に向けて検討を進めている。具体的には、保健師による避難所での被災者の健康状態の把握のほか、兵庫県弁護士会による法律相談や支援相談などを想定している。

芦屋市の職員だけで対応しきれないところは、民間の力を借りながら一人一人に寄り添った支援を進めて

いくという。

芦屋市防災安全課の國則友希さんは「市民の皆さんには、ニュースや市の防災訓練などを通して、少しでも防災に興味を持っていただき、どうすれば自分の命を守るのか考えてほしい」と語っていた。

関東大震災発生から10

0年を迎えた今年、いま一度、災害対策に目を向けてみませんか。



リード芦屋新聞

発行元

リードあしや

記事

谷村京美

写真

野谷和奏

一人にしない社会へ

住民主体の地域づくり支える推進員

芦屋市で地域支え合い推進員として活動をしている、寺岡康世さん（写真上）と藤本亮さん（写真下）に話を聞いた。

地域支え合い推進員は、地域住民の活動の支援などを通して、誰もが住み慣れたまちで暮らし続けるためのサポートを担う。

業務の進め方は市によって異なっている。一つの法人が全ての業務を行っているところもあるが、芦屋市は地区によって担当している法人が異なる。芦屋市西山手高齢者生活支援センターに所属している藤本さんは三条地区と山手地区を、



芦屋市社会福祉協議会に所属している寺岡さんは芦屋市内全域を担当している。寺岡さんは「地域支え合

い推進員の役割は、住民が孤立しない社会や地域をつくっていくことです。人と人、人とボランティア団体

などとの繋がりをつくったり、今あるつながりを保つための支援をしたりすることを心がけています」と話す。

加えて「地域支え合い推進員自身が、地域づくりや地域の住民との関わりを楽しいと思えると、推進員としての活動がより充実するのではないのでしょうか」と話し、地域と密接に関わり支援する推進員の思いを述べた。

地域に寄り添う

「つどい場」から繋がりを

あしや 2023
つどい場ガイド
Ashiya tsudoi-ba guide



芦屋市の地域支え合い推進員の活動の一つに、芦屋市に住んでいる人が自主的に行なっている活動を掲載した「つどい場ガイド」の発行がある。

よりたくさんの方々が芦屋市民に「つどい場」の存在を知ってもらい、「活動をしたくなる場所を作りたい」と思う人が増えて欲しいという願いがある。

芦屋市の地域支え合い推進員に尋ねたところ、「活動が始まるまでは繋がりがなかった参加者同士が、交流を深められるところです」と答えた。また「活動一つ一つにエピソードや思いがあります。主役は活動をしている人たちで、私たちは彼らを後ろから支える存在でありたいと思っています」と話し、推進員一人一人が地域とそこに住んでいる住民に寄り添って活動する大切さを語った。

リード芦屋新聞

絵本の役割伝えたい

発行元
芦屋市立
市や活動
あしや
センター
リード
記事
寺本 空未

「絵本で子育て」センター理事長の森ゆり子さん

「絵本で子育て」センター理事長の森ゆりさんは、いろいろな人たちに絵本の大切さや役割を知ってもらいたいと思い、このセンターを作りました。森さんは、絵本の講演会を開いたり、絵本に関するイベントを開いたりすることで、多くの人にこの想いを伝えようとしています。絵本の講演会に参加してくれる人の年齢や国籍、職業などもバラバラですが、絵本の大切さを多くの人に知ってもらいたいという思いは、同じです。

このセンターを作った理由、2つあります。1つは、読み聞かせ会がいろいろなか場で行われ、子育ての場所で行われ、子どもに中親御さんは、子どもを「抱える親御さんは、多くいて、どうやって言葉をかけていいかわからない」というものでした。そのような人でも、絵本を読んであげただけで、子どもに言葉がけることができるようになります。その



時代と子育て環境の変化

体験できないことが多くなっても大丈夫

絵本をできるだけ家に保管しておいてほしいと思っ

ています。絵本は、親子の

回路を作ります。絵本があ

ることで、将来、子どもが

大きくなっても話の話題に

なったり、小さい時とは違

った子どもなりの読み方を

見つけることができます。

絵本はなくてはならない

ものになっていいると思いま

す。昔は近所の異年齢の人

たちと遊ぶのが当たり前で

したが、今はないことが影

響いていると思います。

動かされるが多かった

ですが、そのような体験が

できなくなってきたりいま

は、いろいろな感情を絵本

から学ぶことが多くなっ

ています。

他にも、子どもたちの3



して、この子に読んであげたいと思う気持ちが大切だと思っ

の言葉で読んであげてほしいと思っ

もにとっては言葉としては理解できず、騒音と同じです。今では、子どもの周りにメディアが存在しているのが当たり前になってきています。

声を子どもに届けてあげてほしいと思っ

同じ体験したような素敵な感覚味わって

時代の変化の中で、電子書籍が作られました。しかし、電子書籍では、絵本の紙質などのこだわりがなくなってしまう。そのため、紙でできた本を買ってほしいと思っ

絵本は、いろいろな問題提起がされていて学べる

とがあります。たとえば、いじめの起こったクラス

で、先生は怒るのではなく、いじめについて書かれ

とも影響していると思っ

す。1つ目は、幼い時からお稽古に行ったりして、遊

べる「時間」がなくなっ

てしまいました。2つ目は、子どもたちだけを遊ばせて

おくのが危険なので、公園などの遊ぶ「空間」がな

なくなりました。3つ目は、「仲間」がいなくな

ってしまいました。絵本の比重が大きくなっ

て

は、

と

ん

は、

の

め、